せきであばら骨折、自殺もよぎる

尼崎公害 苦しみの根幹

患者ら16人の叫び 一冊に

尼崎公害訴訟の原告らの人生の聞き取り調査をまとめた「赤とんぼが舞う青い空を」が出版された。大阪人間科学大大学院の杉本久未子教授（地域社会学）が患者ら16人にインタビューし、壮絶な闘病生活や運動の様子がつづられている。原告団長で尼崎公害患者・家族の会の松光子会長(81)も「私たちがなぜこんなに苦しい運動を続けてきたのか、その根幹が分かってもらえるはず」と話す。（霍見真一郎）

大阪人間科学大教授聞き取り

杉本教授が2003年、男性4人、女性11人の患者と松会長から聞き取った。そのうち3人は、既に亡くなった。

九州から移住した認定患者の女性＝調査当時(72)＝は、ぜんそくで母親を亡くした。夫は車の振動とぜんそくでノイローゼになり、静かな場所に引っ越したが、肺がんで世を去った。自身も具合が悪く、痰を出すのにせきをしたら、あばら骨を折った。誰もいない正月に体調を崩したときは「のどに包丁立てよう」と、自ら命を絶つこともよぎったという。

「尼崎に住んだらみんなぜんそくになるんだよ」。奄美大島生まれの女性＝同(72)＝は、医者から罹患を当然のように告げられた。深刻な大気汚染で、ぜんそくが珍しくないほど広がっていた様子を伝える。損害賠償などを求めた運動についても、当初は周囲から「なんでそんなに（裁判で）もうけなければあかんのか」と、理解されなかったことを取り上げている。

杉本教授は「患者会は、家族のぜんそくで苦しみ、自分の治療もままならない女性の『共苦のコミュニティー』で始まり、被害を作らない『共闘』に変貌。さらに環境を再生する『共生』を目指すものになった」とまとめている。

A5判128ページ。全国の書店で販売。問い合わせはビレッジプレス☎03・3928・7699

公害患者らへの聞き取り調査を本にした杉本教授＝大阪府摂津市、大阪人間科学大学